



体の弱い夫の病気がここ最近で悪化してしまい、
私は危険を承知で魔族街ヴァルビアに薬を求めてやってきた。

森暮らしでお金のない私は店主に足元を見られてしまい、
言われるがまま仕事の斡旋を受けたのだが――



「お、かわいいエルフのネーちゃんいるじゃねーか」
「マジかこいつ、外でこんな格好して頭おかしいんじゃないか」

「……………ふ、ふふっじゃい…ませ…!」

紹介された仕事は風俗嬢として魔族の慰みモノになることだった。
別の仕事を何度お願いしても、この街で他に仕事はないと言われ、
私は仕方なくその場で承諾してしまった――

抵抗も無駄に終わり裸にむかれた私は、店の前を
通るオーク達の見世物にされていた――



「てか、ネーちゃん二発いくらよ……ああん？50デラ!?」
「やつすwwこんなのはした金でお前、股開いてんのかww」
「どうせ頭トンでるか病気持ちか、使い古しの中古クス便器だろ」

「…そんな…(私だってやりたくてやってるわけじゃないのに…)」

罵られて折れそうになる心に、ふと夫の顔がよぎる。
羞恥心でふるえる体をキュッとおさえつけ、何度も覚え
させられた下品な言葉で、オーク達を店内に誘導する。



「…お、お客様…私は病気はもっておりませんし、
お、おマ、おマンコの方も…中古ではありますが、経験は夫のみで
ございます…よろしければ店内にて、淫乱エルフのち、膣入り、
お試しになつていかれません…か……？」

「ハハハハwwそこまでお願いされちゃあ仕方ねえな、
おい、今日はこいつにしようぜ」
「ふん…まあ便器としてはちようどいいか」

「…あ、ありがとうございます…私の中ロ子宮に、たくさんっ…
ザーメン…排泄していつてくだやいな…♡」





(あなたっ…あなたあ…これ、あなたのより…すごい…奥まで届いてっ…こんなの…ダメえっ…♡でも…私がお金たくさん稼いで薬持って帰るからね…!あなた!淫売になってごめんね…!でもオークの子供なんて絶対孕まないから…!元気になったら子供作ってあったかい家庭築こうね…!)

パンっパンっパンっ♡…グチャっ♡

ひき♡ん♡
♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「…!?んんっ!?あつ…♡あひ…っ!ダメ、ダメダメえ…♡なんで…!?いやああつ!」
(なんで子宮降りてきちゃうの!?)
欲しがっちゃダメなのに!ダメっ待って…精子やダあ…!」
「こいつ子宮降りてきてんぞ?水漏れ中古肉便器のくせにオークのザーメン欲しがりやがつてw」

「ひやあっ♡♡これは、違うの…♡欲しがってなんか、あうんっ♡…ない…からあ…!」

「子宮は俺のチンポと生キツスしたがってるぞ!!
どうなんだこの淫乱メス豚エルフがあ!」

「いやああだめえ!子宮降りちやダメえ!ザーメンいやっ
オークの子供いやあっ♡♡」

「うるせえっ!…おら!」発目いくぞっ!…おおおおっ!」



ズッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ! ギョッ!

「ああああああっ!ダメっ出てるっ中ではいるっ!
妊娠しちゃう! あっ♡あっ♡あああっ♡」

「はあ...はあ...はあ...」

「おい、なに休んでんだ、まだ終わってねえぞ」

「...!?や、やだ!もうやめるっ娼婦やめる!」

「だめだめだめえ!抜いて!チンポ抜いてえ!」

「やめるわけねえだろ!金払った分きっちり働け!オフあ!」

グチュ♡グチュ♡グチュ♡ズリュウ♡ズチュ♡ズチュ♡ズチュ♡

「ざあっ」

「ざあっ」

「ズチュッ」

「グチュッ」

「グチュッ」

「もうイキたくないっ!あなたっ助けてえ!オークチンポで妊娠やだあっ♡あっ♡ああっ♡きちやうきちやうううっ♡♡♡♡あっ♡いや、ああああっ!♡♡♡♡」

「はあ...はあ...はあ...」

「あじっオマン!あじっ!子宮の奥叩かれてる!」





ハアツ♡ハアツ♡ハアツ♡

「中古便器の割にはけっこう楽しめたな」
「そっだな、んじや仲間呼んで今からまた輪姦そうぜ」

「えっ…そ、そんな、休ませて、お…お願いします…っ」

「お前、自分の値段知らないだろ、相場のたったの1/10だぜ」

「…えっ…1/10ってどういう…うそ…そんなっ…」

「たくさん稼がないといけないんだろお？…協力してやるぜ…」

「…いやっ無理です…いやっ、いやああああっっ!!」



